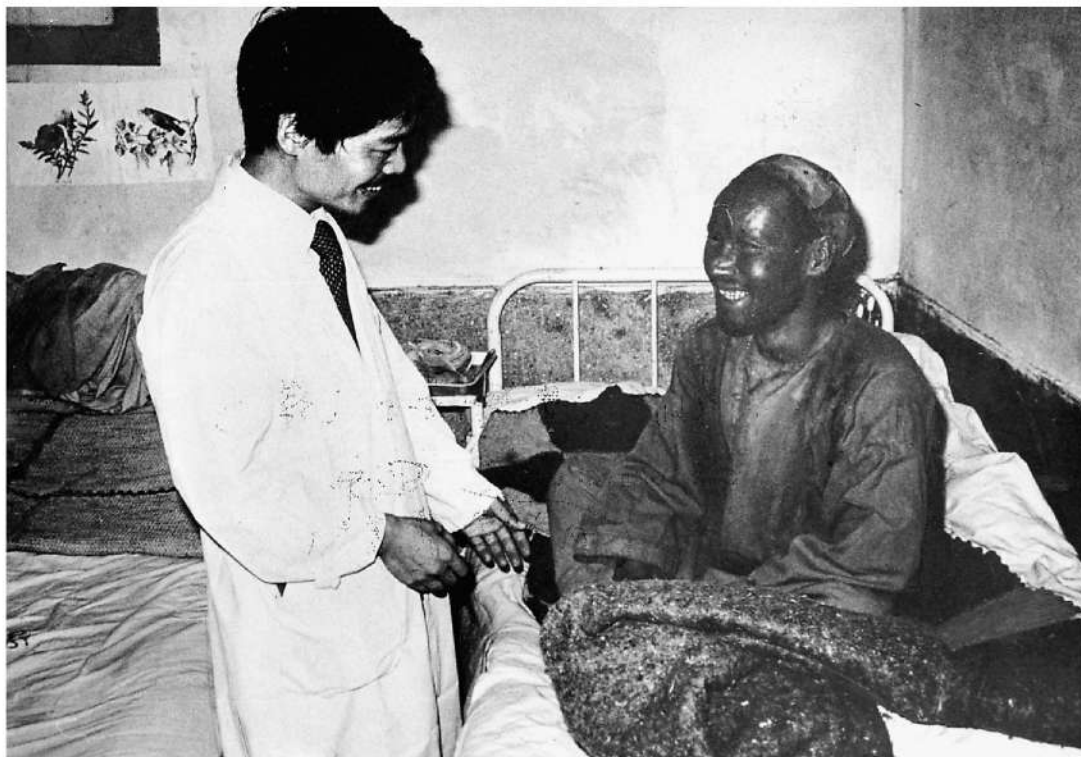


# もの知り こどもタイムズ

## 砂漠を緑にかえたお医者さん 中村哲先生の物語

2



パキスタンのペシャワールにある病院で患者さんの手当てをする中村先生  
1984年

「大好きなチョウが見たい」

### パキスタンへ山登り (31歳)

中村哲先生は小さいころから昆虫と山が好きでした。チョウが見られると思い、31歳のときにアフガニスタンとパキスタンという国の間にある高い山に登りに行きました。とても美しい山だったので、どちらの国のことも好きになつていきました。  
福岡県の病院で働いていたとき、パキスタンでお医者さんを探している知りました。「あそこで働いてみたい」と思い、1984年にペシャワールという町の病院で仕事を始めました。37歳のときです。  
その病院にはちゃんとした道具がありませんでした。ピンセットはねじれ、こわれた聴診器を耳にはめるとけがをしました。しょっちゅう停電がおきるので、懐中電灯で照らして手術をしたこともあります。患者さんはおんぶして運びました。福岡県の病院とはずいぶんとちがいました。



### 「だれも行かないから、私たちが」 アフガンに病院 (45歳)



銃の音がするなか、アフガニスタンからパキスタンに逃げる難民たち (AP=共同)

パキスタンのとなりアフガニスタンという国があります。戦争が起きていたこの国からは、山を越えてパキスタンに逃げてくる人がたくさんいました。中村先生がパキスタンにあるペシャワールの病院で手当てする患者さんも半分はアフガニスタンの人でした。

アフガニスタンの山奥にある村では、お医者さんがいなくて困っている人がたくさんいました。1991年、45歳のときに中村先生はアフガニスタンのダラエヌールにお医者さんたちと協力して病院を建てました。

山奥はお医者さんたちが住んでいた都会とは言葉も文化もちがいます。ここで働くことをあきらめようとする人もいました。そのとき中村先生は「だれも行かないから、私たちが行くのです」と言いました。



やがて、村の私たちは病院のおかげで病気になることも安心してくらせるようになりました。都会から来たお医者さんたちも村の人と仲良くなりまし



特別サイトに子ども向けページ

西日本新聞の「中村哲医師特別サイト」の子ども向けページができました。アフガニスタンの子どもたちの写真などを見ることができます。

### PMSとペシャワール会

「PMS (平和医療団・日本)」は、中村哲先生が総院長をつとめた非政府組織 (NGO) です。アフガニスタンで用水路の工事をし、農場で野菜やくだものを育てています。PMSは「Peace Japan Medical Services」を短くした呼び名です。その活動は「ペシャワール会」という団体によって支えられています。ペシャワール会はパキスタンの病院で働くことになった中村先生の活動を応援するために1983年につくられました。事務所は福岡市にあります。中村先生は現地の代表でもありました。



ときどき流れる川の泥水を飲む子ども =2000年ごろ、PMS提供

### 大干ばつの中で手当て (53歳)

「赤ちゃんが死んでしまう」

中村先生が53歳のとき、戦争で苦しんでいたアフガニスタンで、また大変なことが起こりました。水が足りなくなり、大地がからからにかわいてしまったのです。2000年春の大干ばつです。  
畑は大きな岩が転がるかわいた砂漠になり、野菜や小麦などの食べ物とれなくなり、水も食べ物もないので、たくさんの方が難民となつてふるさとを出ていきました。人がいなくなり、村が消えました。のどがかわいた子どもたちは、干からびた川にときどき流れる泥水を飲んでおなかをこわしました。食べ物がないので体が弱つていきました。中村先生は弱った赤ちゃんをたくさん手当てしました。遠くから何日もかけて病院に着いたのに、お母さんにだっこされて順番を待っている間に死んでしまう子もいました。食べ物ときれいな水があれば助かる命ばかりでした。